

5 歳児クラスにおける造形表現活動の実践報告 : 大阪樟蔭女子大学附属幼稚園での実践報告Ⅱ : 初め て取り扱う 素材・材料を用いた表現・造形指導

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ABE, Hisashi メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4085

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



5歳児クラスにおける造形表現活動の実践報告 —大阪樟蔭女子大学附属幼稚園での実践報告Ⅱ：初めて取り扱う 素材・材料を用いた表現・造形指導—

児童学部 児童学科 安部 永

要旨：平成25年度より本学附属幼稚園で、作品ありきではなく、造形の行為（プロセス）を重要視した絵画指導を開催している。年間12回5歳児クラスで様々な素材・材料を扱う造形活動や、造形遊びなどを行っている。本稿では様々な題材の中から2種の題材を取り上げ報告する。第1は水分を含むと固着化する童仙房粉末という陶芸材料に着目した平面制作から立体造形へと移行する素材の取り組み。第2は可塑性のある素材である土粘土を使用して、子どもの体全体を用いた粘土遊びからの立体造形である。これらの題材は園児たちにとって新しい素材・材料であり、そのはじめての経験に着目し、それらが子どもたちの表現したい気持ちをどう引き出すかを主題に絵画指導に取り組んだ観察記録である。

キーワード：造形表現、造形指導、土粘土、陶芸、こども

平成25年度より、本学附属幼稚園において、5歳児を対象に絵画教室を開催している。それは日頃の活動の中ではできない、「作品ありき」ではなく「造形の行為（プロセス）を大切にしたい」絵画指導を幼稚園で実践してもらいたい、という園側の要望がきっかけであった。

幼稚園教育要領＜平成20年告知＞における表現領域ねらいには「(1) いろいろなもの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」と記されている。またその内容において、「(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」「(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」とある。

また保育所保育指針＜平成20年告知＞における教育にかかわるねらい4表現には、「(イ) ①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ」とも記されている。

実践2年目となる平成27年度は、過去の絵画教室の実践もふまえ、いろいろな素材に注目し、子どもたちが初めて取り扱う素材・材料を用意し、子どもたちの表現したい気持ちを引き出すことはもちろん、「遊びの中での表現活動」も視野に入れて取り組んだ。

2 実践報告

実践期間：平成27年4月～平成28年2月うちの7月と9月と2回の実践について報告および考察を行う

実践例①「砂から粘土に」

実践例②「粘土でつくろう」

実践報告の手順として以下の7項目をたてた。

1-1 設定 環境設定の工夫

1-2 題材研究 なぜこの時期にこの題材を選ぶのか

1-3 制作手順

1-4 子どもたちの様子 子どもたちの取り組みと作品の質

1-5 作品例

1-6 考察

1-7 資料（指導略案）

2.1 実践例①

附属幼稚園絵画教室

場所：大阪樟蔭女子大学附属幼稚園

対象：5歳児

題材：「砂から粘土に」

2.1.1 設定

環境設定の工夫

環境的には、非常に細かい砂（童仙房）を使用するため、教室全体にブルーシートを敷いて、制作活動によって教室を汚すことがないように（子どもたちが汚れることを心配して活動が小さくならないように）配慮しておく。そのうえにB2サイズの画板を人数分用

意しておく。

2.1.2 題材研究

なぜこの時期にこの題材を選ぶのか

第1回目は個人活動を行い、第2回目は「大きな紙に描く」ことによって子どもたちの描くことへのルーティンを取り払い、自由な雰囲気の中での制作を試みた。第3回目の絵画教室である今回は、「砂」「粘土」との出会いの回、そして第4回の粘土の立体制作への前段階として位置づけ、設定した。

2.1.3 制作手順

画板のまわりに園児たちを座らせる。導入として、まず大きなバケツいっぱいに入れた砂（童仙房）を見せて、園児たちの興味を引く。「これ何？」との指導者の問いに対して、園児らしい様々な回答が続く。「こな」、「お砂場の砂」等の声が出たところで、園児たちに直接接触してもらう。すると、「お砂場の砂よりサラサラや。」との声があがる。

その童仙房をボウルに分けて一人ずつに配布し、触ったり、つまんだりしてもらう。それからおもむろに筆を用意して配布する。園児たちから「あれ？」などと声もれる。砂と筆との組み合わせへの戸惑い、「どうするの？どうなるの？」という期待感も感じ取れる。

次に、指導者が筆を持ち白い紙の上に水で絵を描く。もちろん透明なので園児たちには見えない。その後、その上に砂（童仙房）をサラサラとまぶしていく。それから余計な砂を振り落とすと、水分により固着した砂の模様の砂絵が出来上がる。

本来砂絵は小学校などでよく行われる教材である。アクリル絵の具などで染めた色砂を何種類か作っておき、下絵の上にボンドなどをのせ、順に色砂をふりかけ、絵を構成していく技法である。

5歳児では、なかなかその工程は難しいと思われるので、この度は「砂」で絵を描くことに専心する。普段の生活の中で、砂で絵を描いたことがある子どもは少ないと思われる。実際、砂場にあるような普通の砂であれば水分で固まることはなく、そのままでは紙には定着しない。水分を加えることにより粘性がうまれる童仙房だからこそ、紙に固着し絵が描けるのである。園児たちは指導者のデモンストレーションに驚いていた。

指導者が見本を見せ、まる・しかくなどの線、面の塗りつぶしなどを説明し、実際に子どもたちにも描いてもらう。その際、大量に振りかけると砂が舞ってし

まうので、注意を促した。

2.1.4 こどもたちの様子

砂遊びはこの時期の園児にとってもなじみのある活動である。ただ、その砂を表現活動の教材として活動をおこなうことは園児たちにとって初めての経験であったと思われる。

砂（童仙房）を触ったり、サラサラとした感触を楽しんだ後、砂絵制作に入るのであるが、砂遊びの活動が面白く、童仙房を紙コップからバッドに移す行為を繰り返している園児が見られた。描く活動に入ってから、女兒は星やハート形のアイコンを描く傾向がみられ、男児はアクション的な筆あとを楽しんでいる様子が見られた。指導者としては、砂絵的な活動の後、バッドに童仙房を集め、水を加え練ることにより、粘土に変化していく活動に進みたかったが、思いのほか園児たちが集中し、活動をやめないなのでこの度は砂絵の活動にとどめた。普段の制作に比べて集中力が持たない男児も一生懸命活動ができていた。ただ4つ切りの画用紙を用いたため、アクションペインティング的に活動を行うと描くスペースに限界があり、早々と完成したと申し出てくる園児もあり、画用紙のサイズなども今後は検討していかないとはいけない。服も、髪の毛も汚れてしまうのであるが、そのような活動は園児たちにとって魅力的であるらしい。

筆を使って描いたり、指を使って描いたり活動が原始的になればなるほど、ダイレクトに感情が作品に反映されるような気がする。

2.1.5 作品について



図①

図①はこの園児は砂絵の活動を非常に楽しんでいる。具体的な絵を描くことよりも、筆のストロークの心地

よさを楽しみ、その痕跡としての砂絵を繰り返し行っている。一度に振りかけることのできる童仙房の量が限られているので、砂の載りの少ない部分が見受けられ、描きたす行為を楽しんでいる。普段のように自由に描けない不自由さが、集中力を高めることになっているようである。山崎つるこ（2000年）は、子どもは制限を設けられると最初は戸惑うが、すぐに集中力がたかまり大人顔負けの意外性を発揮する、と述べている。



図②

図②は覚えた漢字を記号的に作品に用いている。アクション的な部分は少ないが、太い筆で力強く描いている線が生き生きとして、見る者に力強さを感じさせる。指で何度もこすりつけた活動の後子どもらしい。

2.1.6 考察

新しい材料・素材は園児たちにどのような影響をもたらすのか。

本時の主材料の砂、「童仙房」は陶芸用の材料である。本来は粘土に混合することにより、耐火度を上げ作品の歪み防止に利用したり、焼成時に作品の底に敷き、釉薬のくっつき止め（より土）として使用したり、セーゲルコーン立てやとち製作の道具土として利用したりするものである。筆者はその粘性に着目し、粘土になる砂として教材化を試みた。このたびの制作でも「砂から粘土へ」という展開を提案し、制作をスタートさせた。「紙に絵が描ける不思議な砂」「砂と筆と水だけで絵を描くこと」に子どもたちは驚き、興味をもって活動することができた。いつも遊んでいる砂と同じようなのに何か違うことに気付き、より興味が深まったのだろう。砂絵に対する子どもたちの集中力が予想以上で、「粘土へ」の部分の展開は次回への持ち越しとなった。ただ制作中に間違えて紙コップに水を加え

粘土状にして、それを紙の上に配置する試みを行った園児もあり、そのあたりを展開させることができればより、面白いものになったのではないかと推測される。園児たちは汚れたことに不満を漏らしてはいたが、なかなかできない活動を楽しんでいた様子だ。

2.1.7 資料

平成 27 年 7 月 5 日

題材「砂で描いてみよう」指導略案

時間	幼児	指導者（補助）	準備物・環境
14:00	講師の説明を聞く ・砂をさわる ・紙コップに砂をいれる ・感想を言う ・水を加えてねる	本時の内容を伝える。	タライ ブルーシート 画板 童仙房 500 グラム 紙コップ ボウル
14:10	制作をはじめめる ・講師の話聞く ・水で絵を描いてみる ・砂をかけてみる ・余った砂をまたカップに集める。	砂が水で固定化されも模様になることを提示する。 ・カップに上手に砂を入れることができるよう補助	随時、園児が使いやすいように環境を変化させる。 ・砂が飛び散らないよう注意する。
14:45	制作終了する		活動の様子
14:50	手を洗いに行く	クラスごとに移動させる。	
15:00	保護者と帰る	保護者にこどもを引き渡す	

2.2 実践例②

附属幼稚園絵画教室

場所：大阪樟蔭女子大学附属幼稚園

対象：5 歳児

題材：「粘土で作ろう」

2.2.1 設定

環境設定の工夫

環境設定としては、いつものようにブルーシートを敷いて汚れ対策を行う。その上に人数分の画板と水分補充用の水入れを用意しておく。図③参照



図③

2.2.2 題材研究

なぜこの時期にこの題材を選ぶのか

前回の教材が「砂から粘土へ」ということで、園児たちは非常に土粘土に興味を持っており、「次回は焼き物を作る」と告知するととても反応がよかった。粘土遊びだけでなく「ヤキモノ」というキーワードに園児たちが反応したのも興味深い。

それゆえ当初の予定通り、第4回目の絵画教室は実際に粘土造形から焼き物を作る教材を選択した。

粘土という素材は、幼少のころから様々に体験している。紙粘土、油粘土、小麦粉粘土などがそれである。年齢の低いときは間違っても口に入れても大丈夫との理由で、小麦粉粘土が教材として使われることが多い。教材としての利点は簡単に入手できる。汚れがすぐに落ちる。固さの調整が容易である。また食紅を加えることにより、様々な色の発色が楽しめることなどがあげられる。欠点としては、瓶や陶器、プラスチックなどの吸水性のないものには永久的な定着が難しいのと、ボリュームを出すような大きい作品を作ることが難しいことである。小学校の低学年などでは油粘土が教材として使用されることが多い。私も小学生の頃、自由遊びの時は粘土板の上で様々なものを作っては壊し、創造の楽しみを得ていた。油粘土も入手が簡単であるので、比較的幼稚園などでも粘土遊びとして使用されている。また個人使用としても保管が容易である。ただ、独特な匂いがあり、固定した色がついているので、混色したり彩色したりすることが難しい。また冬期はかなり固くなり温めないと使えないのも欠点である。紙粘土も非常に入手しやすく、使いやすい教材である。簡単にいえば原料は紙とのりであり、自作することも可能である。可塑性もあり、絵の具などで彩色も簡単である。また幼児が紙粘土そのものを作る活動も可能

であり、環境設定も平常の保育室で問題なく、粘土の中ではもっとも扱いやすいものといえる。ただ、大きいものが作れない、乾燥に時間がかかる。室内展示に限られ、恒久性にかけるという欠点もある。

2.2.3 制作手順

園児がそろった段階でお話を始める。園児たちの中には前回の様子を覚えている子どももあり、「今日はやきものするの。」などと声があがっている。そのタイミングでおもむろに粘土の塊を提示する。30センチ四方の粘土の塊は園児たちにとっておそらく初めてのようで、「それなに。」との疑問の声が上がる。「あ、ねんどやな。」との声も上がったところで、持ちたい人手をあげて、と声掛けをすると、勢いよく手が上がり、何名かに持ってもらう。20キロの粘土なのでもちろん指導者が支えないと持ち切れないが、園児たちは顔を真っ赤にして体全体で抱きかかえ、粘土の重みを体験している。古田一夫 他(1988)は土粘土は費用が安いこともあり、粘土に体当たりさせるような題材、子どもに積極的な関わり合いを持たせるような教材、思い切った活動を目標とする題材などは、土粘土を扱うべきだ、と述べている。

園児たちの興味・関心を引いたところで、指導者の周りに園児を集め、もう一つのデモンストレーションとして、土粘土のカットを行う。これは粘土の粘性をいかした作業であり、初見では非常に視覚的なインパクトが与えられる。私は、造形指導においてこの初めて経験する教材・画材・体験を非常に重要視している。磯部・福田(2015)は、アートとは、モノとの「出あい」によって生まれ、表現することの繰り返しにより形や色生まれる。出会う素材がクレヨンや絵の具であれば、絵になり、砂、紙、雪などのあらゆる物との出会いによって色や形は広がる。感受性豊かな子どもは出会いにより、素直な優れた表現者になりうる、と述べている。

粘土を切る際には、普通、へらなどを用いると考えるが、じつはワイヤーや、切り糸というものを使用すると非常にスムーズに切ることができる。へらで切るとどうしても粘性が高いため粘土がくっついてしまい、かなりの力を必要とし、切り口も美しく仕上がらない。しかし、ワイヤーで切ると、鋭利な刃物で切ったような切り口となり、非常に美しい。園児たちを集めて、「何できろうか。」などと声掛けしながら、様々な道具で試した後、ワイヤーを使用し、20キロの粘土をスパッと波状に切る。すると園児たちから大きな歓声があ

あがる。その頃には園児たちは粘土に触りたくてうずうずしている様子である。この雰囲気になれば、導入としてはいい状態である。子どもたちの粘土に触りたいという欲求が素直に制作にあらわれ、面白い活動に発展していくことが予測される。

2.2.4 子どもたちの様子

まずは、園児たちに1人1キロの粘土を配布する。形は丸い状態。すべてに配布し終えてから、指導者がみんなの前で球体を握りつぶして、指の隙間からはみ出る様子を見せる。「柔らかいなあ」「早く触りたい」との声が上がる。土粘土の長所の一つである感触の良さを実感してもらうために、園児たちにも同じ活動を促す。前回の童仙房の教材でも述べたが、土粘土は水分の調整で柔らかさを変えられ、特に泥粘土状の物の感触は非常に心地よい。子どもたちの生活の変化により、泥遊びや土に触れることが少なくなった背景もあり、ぜひこの機会に体験してもらいたいものである。今回の粘土は既成のものに、指導者があらかじめ土練機を用い、水分を加え練り直したものを使用する。市販のものは成型用のためやや硬い傾向があるからだ。

説明を終え、園児たちに粘土を自由に触ってもらう。すると最初はおそるおそる指導者の模倣をしている子どもや、指で穴をあけている子ども、早速様々な物を作り始める子などがある。10分ほど、自由にしたのち、指導者と一緒に基本的な活動を行う。粘土を広げる。もちろん指で上から押さえる子どもがほとんどであるが、なかには立ち上がり、粘土を画板に叩きつける子どもも現れる。非常にアグレッシブな活動であり、子どもたちから歓声があがる。板にバンバンたたきつける音とともに、粘土の面積が広がっていく。あえて指示せず状況を見ていると、ほとんどの子どもたちが立ち上がり粘土と格闘している。図④参照



図④

この粘土をたたきつける行為は、実際の陶芸制作のなかでも空気を抜く練り方として行われる場合がある。その様子がある程度取まったところを見計らい、指導者が裸足になり粘土を踏みつける。すると子どもたちは非常に楽しそうに粘土を踏みつける行為にかかわっていく。足の裏・体全体で粘土の感触や可塑性を子どもたちは体感しているのである。その様子は遊びと、表現活動が重なり合う部分である。男児の方が、体全体を使った行為を行う傾向が強く、女児は、細かい遊びに移行する傾向がみられる。絵画制作に比べ、遊びの要素が色濃く表れる教材のためか、園児たちの楽しい声があふれ、集中力を保った制作となっている。セチェイ・ヘルミナ（2003）は、子どもが何かに没頭するのは、自分の好きなように、そして体験に沿って創造できたときである。創作への没頭は丁寧さをもたらす、と述べている。子どもたちの活動は様々に変化していき、足の周りに粘土を付けている一人の男児がいたので、指導者もそれを真似てみる。その足を抜き取ると園児の誰かが「口みたいやな」と発言したので、そのまま鼻をつけ、目を描いたらどうだろうかと子どもたちに問いかけると、「変な顔やな」といいながら粘土で顔を作る表現活動に移っていく。図⑤参照。



図⑤

板の上に、踏みつけた粘土をはりつけ、足を抜いた後を利用して顔を作る。その口をどんどん広げて大きく笑っているような顔を作っている。子どもらしく非常に大胆な指使いである。粘土の特徴として、この可塑性がある。すなわち作っては壊し、また創造する。三上利秋（1992）は、乳幼児は丸めたり、破ったりして手とモノとの間に様々な関係を生み出している、と述べている。

粘土遊びも十分に楽しんだあたりで、次の課題である焼きもの作りに移る。実際焼き物というのは粘土を

焼成することにより完成させるものである。厳密には焼き物となるべき立体物を造形するということになる。子どもたちの作った顔を机間巡視し鑑賞したのち、「今からお皿を作ろう」との声で指導者がおもむろに粘土を固めていく。こどもたちは口々に「つぶすのいやや〜」「もっとやりたい〜」との声もあがるが、指導者の動きにつられ、バンバンと粘土の板を固めて地面に叩きつけていく。粘土が塊になった時点で粘土の半分を回収する。これは5歳にとって1キロの粘土を器の形に制作するのは焼き物の制約的に難しいからだ。焼成のための制約として、ゴルフボール大の「塊」を焼成するのは非常に難しく1200度以上の温度上昇では爆発する可能性が高い。実際、用途を持つ皿を製作するとなると、技術的な問題が発生するが、今回は「皿のようなもの」「園児にとっての皿」であるので、500グラムの粘土を再び、手のひらで叩いたり、伸ばしたりして円形状の形を作る。こちらが促さずとも、ふちを立ち上げ、器の形状にしていく様子が見られた。最後に竹串を配布して自由に模様をつけて作品は完成である。「いつできるの。」「焼き物早くほしい。」といった発言も最後には見られた。園児の完成作品への期待感、楽しみも見て取れた。

2.2.5 作品について



図⑥

図⑥の顔の作品である。顔のテクスチャーをつくる指あとも大人では考えつかないところである。この作品は女兒のものであり、頭足人ではないがサンタクロースを作ったようで、物語的な部分もあり帽子と体を付けているのが作品を楽しいものになっている。粘土の特



図⑦

性を生かしたダイナミックな作品である。

図⑦の作品は、お皿である。男児が作ったものであるが、堂々とした指の跡が特徴である。皿の立ち上げの部分指でぐっとつかんで持ち上げており、両手でつかんだ指あとが、しっかりと残っている。子どもしか作ることのできない作品である。粘土の柔らかい部分の感触が楽しいのか、皿の内部に指の痕跡を残しているのが現代陶芸の作品を彷彿とさせて興味深い。

2.2.6 考察

新しい材料・素材は園児たちにどのような影響をもたらすのか？

なかがわちひろ（2007年）は、おとなは触覚だけで作った造形を見て、そのちせつさに苦笑い、見て作った作品の方が絶対に優れていると思込んでいるようだ、と述べている。5歳で土粘土にふれてみることは非常に良い経験であろう。土はじっくりとした感触を子どもに与え、情緒を満足させるばかりではなく、自然に緊張感を和らげる。固さという適度な抵抗感があり立体的な表現もできる。また他の素材と比べ、造形、破壊、再生、というサイクルを感じ取れるのが、この素材の特徴ともいえるだろう。

このたびの実践では新しい素材・技法の2つのアプローチで制作を試みた。指導者として、できるかぎり、子どもの想像力が広がるような助けが重要であるため、できるかぎり、何を作るとかではなく、子どもの活動から生まれてくる結果を重視して次の活動につなげることを心掛けた。たたきつける行為の面白さ、足で踏む行為の面白さ、手でかき落とせば指あとが生まれる。その繰り返しの行為が面白い。また足を包むこともできる。土粘土の特徴はその感触に立体的な空間把握である。今後は、体全体を使った活動としての粘土遊び、

造形活動、焼きものの作りともう少しテーマを細分化して、幼児の表現活動に組み込んでいくことができれば、おもしろいのではないだろうか考える。

2.2.7 資料

平成 27 年 9 月 9 日

題材「粘土でつくろう」指導略案

時間	幼児	指導者（補助）	準備物・環境
13:00	講師の説明を聞く ・粘土遊び *粘土を広げる *たたきつける *足で踏む *顔を作る	粘土遊びについて指導する。 ・粘土の板を作る	ブルーシート 画板 土粘土 1 人 1 キロ ボウル
13:20	・粘土で器を作る。	焼き物（粘土）でお皿を作ることを理解させる ・作品に名前を描く補助	教室内が汚れないように気を配る。
13:45	制作終了		
14:50	手を洗いに行く	クラスごとに	
15:00	保護者と帰る	保護者にこどもを引き渡す	

*様子を見て、本時は粘土遊びだけの場合もありうる。
ハカリ・雑巾・ボウル（各 1 キロの粘土を用意）

3 考察とまとめ

本稿では、初めて取り扱う素材・材料を用いた表現・造形指導が子どもたちの作品や活動にどのような影響を及ぼすかについて観察および考察を行った。実践例①「砂から粘土に」においては、「童仙房」という子どもたちにとって初めての素材を用いた表現活動を行った。通常体験している砂場のそれと違い、水で固着する性質、砂より比重の軽い素材であり、感触も独特なものである。これらの新しい要素・素材の粘性・可塑性といったものが子どもたちに刺激を与え、普段集中力がもたない園児が繰り返し、繰り返し制作を行っていたのも興味深い。

また実践例②「粘土で作ろう」では、いつもは使用しない大量の粘土の提示により、子どもたちの制作意欲を高め、新しい道具・技法を用いることで集中力を維持できるかを観察した。初めて取り組むことに対しての園児たちの反応は素晴らしく、限られた時間の中で活動を終えるのは難しいほどであった。

今後の課題としては、限られたエリアでの活動でなく、汚れなどを気にせずアクティブな活動に取り組むことができる場所であれば、より新しい材料、初めての活動を広げていくことができるのではないだろうか。また新しい素材と触れることで生み出される遊び的要素にも注目したい。子ども達は新しい遊びの創造者であり、子ども達に生み出された創意工夫といったものが作品に反映され表現活動の可能性が広がるだろう。今後、子どもたちに様々な経験をさせ、造形表現をとおして、子どもたちが豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする援助を指導者として継続して行っていきたいと考える。

引用文献・参考資料

- 1) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領 P11-12
- 2) 厚生労働省 2008 保育所保育指針 P18
- 3) 山崎つるこ 2000 美育－創造と継承 P92-93 「芦屋市立美術博物館」
- 4) 古田一夫 編 1988 3.4.5 歳児の粘土指導 12 か月 P138 「黎明書房」
- 5) 磯部錦司・福田泰雅 2015 保育の中のアート P27 「小学館」
- 6) 三上利秋 編 1992 表現Ⅱ P3 「田研出版」
- 7) セチェイ・ヘルミナ 2003 保育園での美術教育 「明治図書出版」 P10
- 8) なかがわちひろ 2007 おえかきウォッチング P103
- 9) ロバート・ヘンライ 2011 アート・スピリット 「株式会社国書刊行会」
- 10) 中村錦平編 1994 母と子のやきものをつくる 「株式会社美術出版」